

この学校にわたしたち

2022. 05. 25 N010

信頼の言葉、励ましの言葉



私がかつて5年生の担任をした年、初めての算数の授業とき、ある男の子が「わからへんし…」「算数、無理やし…」とぶつぶつと言っていました。その子は毎時間、毎時間、算数の時間になると同じことを言っていました。私はこの言葉の裏には「この子は本当は算数ができるようになりたい」という心が強く表れているのだと思い、とても辛くなりました。「算数、わかりたいんだよね」とこの子の思いを受け止めながら「絶対できるようになる」と励まし続けました。実際、この子は2学期には「無理やし…」という言葉と言わなくなり、3学期には「算数、面白くなってきた」と言えるまでになっていきました。

「どうせやっても無駄」と決めつけたらその瞬間に全ての可能性や希望が閉ざされてしまうことになります。私は子どもたちの「あきらめの心」を「できるようにがんばろう」という「挑戦の心」に変えていきたいと思います。

こんなエピソードがあります。今から50年ほど前、中国の周恩来という人を乗せた飛行機がバグダッドの空港に降りようとしたとき、突然、空港の電気が全て消えてしまったのです。パイロットたちは突然のできごとに、燃料がなく、引き返すこともできない状態で、混乱に陥ってしまったそうです。しかし、周恩来は動じることもなく、そのパイロットたちに「私は何も心配していません。皆さんが困難な着陸を見事に成し遂げることを私は断じて信じています」ときっぱりと励ましたのです。パイロットたちはこの力強い絶対の信頼の一言に不安も吹き飛び見事、無事着陸したそうです。

家庭教育・学校教育についても同じことが言えるのではないのでしょうか。超情報化社会と呼ばれ、子どもたちは友だちのこと、学習のことなどいろいろなことに不安を感じることでしょう。そんな時、私たち大人が「絶対にできるよ」「大丈夫だよ」と信頼の一言、励ましの一言、確信の一言をかけてあげ、安心して、様々なことに対して挑戦できるよう、見守っていききたいと思います。

はじめの一步

先日、八対野区及び山田野区の保護者や地域の方から県道を通る車がものすごいスピードで、登校が危険との声を聞かせていただきました。翌日より、毎朝交互に両方面に出向き、様子を確認してきました。先週、この状況を津南警察署地域課に相談をし、文書によりパトロールの要望をさせていただきました。早速、23日（月）に地域課長より連絡があり、「警察としても現状を確認しながら、前向きに検討していきます」との返事がありました。まずは一步前進です。